

特集 学生の研究活動報告－国内学会大会・国際会議参加記 31

ASEAN グローバルプログラム に参加して

島田 祥孝
Yoshitaka SHIMADA
機械システム工学科 2年

1. はじめに

2019年8月27日から9月5日までの10日間、ベトナム、シンガポールでのASEAN グローバルプログラムに参加し、企業訪問や現地学生とのPBL、ビジネスパーソンの講演や交流会を行った。具体的な日程及び内容は下記の表1に示す。今回のプログラムの目的は東南アジア諸国の大学や企業と連携し、現地学生との交流や、企業視察や若手の社会人と交流する事により自分の視野を国内から国外にも広げる事であった。

表1 日程

日程	内容
8月27日	オリエンテーション
8月28日	栄光堂 Rikkei Soft 訪問
8月29日	ハノイ工業大学で PBL
8月30日	PBL 発表
8月31日	観光
9月1日	シンガポール着 WASABI CREATION 講演会
9月2日	南洋理工大学見学
9月3日	Google 訪問 ビジネスパーソン交流会 加藤氏による講演会
9月4日	自由行動 シンガポール発
9月5日	帰国

2. 参加目的

私はこのプログラムに参加する以前より海外で就職したいと考えていた。そのためにはまず実際に海外で働いている方の意見を聞きそれを参考にすること自分自身の最終的な目標に繋がるのではないかと

考えた。そして海外で働くにあたっては英語は必須であり、日本で学んだ自分の英語力がどれだけ通じるのか試す良い機会であると同時に、確実に今後の勉強の励みにもなり世界で活躍するグローバル人材になる一步を踏み出すことができると考えていた。また PBL やプレゼンの機会がプログラムに含まれており、学生時代にこうしたことを経験する事により他の学生に差をつけたいと考えていた。1年生の時に GCCP という大学のプログラムに参加しており、学内の生徒と PBL を行った。その際に、あまり相手の意見を尊重できずうまく班をまとめる事ができなかった経験を踏まえ、その反省を生かし今回は必ず成功し成長を遂げたいと思い、このプログラムに参加した。

3. 研修内容

今回の研修の行程の中で特に印象に残ったベトナムでのハノイ工業大学の学生との PBL について以下に詳しく述べる。この大学は約 50,000 人もの学生が在籍しており、名前の通り理系で有名な大学だが、大学課程には文系の学部もありその中の言語学の学科の学生と協力して PBL を行った。そこで私は2つ深く感心した事がある。1つは彼らの積極的な姿勢である。PBL を進めるにあたり彼らは分からないことがあればすぐに日本の教員にでも質問をし、私達日本の学生が意見をあまり出さない中で彼らは自分達で沢山の意見を出していた。その状況を目の当たりにしそこで私たち日本人の消極的な姿勢が顕著に表れたと感じた。しかし彼らの素晴らしい一面はそこでは留まらず、自分達の意見を出しつつ必ず私達の意見を聞きそれに関する意見を出してくれたためスムーズに PBL を進める事ができた(写真)。私達が最終発表で1位を獲得できたのも彼らの柔軟な発想と協力的な姿勢のおかげでありとても感謝している。またキャンパス内で授業を見学した際に、ベトナム人学生たちは挙手をし積極的に発言を行い、わからないことがあればすぐに質問をしていて自分と学びたいという姿勢に決定的な差がある



写真 PBLの様子

と感じた。自分自身のこれまでの学生生活を見直す良い機会になった。

もう1つ感心した事が彼らの英語力の高さである。ベトナムの公用語はベトナム語であり、英語は私達日本人同様に第二言語となる。しかし、実際会話をすると力の差は歴然であり私達がスマホの翻訳機能に頼ってしまう場面も多数あったのに対してベトナム人学生たちはそうしたツールに頼ることなく話していた。ベトナムではより良い企業に就職するためには英語のスキルが必須であり、彼らにとって英語は出世のツールである。そのためベトナムでは英語は小学校から授業があり、日本より早くから教育されている。日本語だけで出世できる日本人とは英語における重要度の差を感じた。中学校から今まで英語を学んできたはずなのにいざ会話になると単語や上手な言い回しが浮かんでこないことに対してベトナム学生は次々に英語で会話することができ、ほとんど同じ期間英語を学んできたはずなのにどうしてこれほどの差が生まれてしまうのか考える良い機会になった。そこでたどり着いた結論がアウトプ

ットの差だとなった。日本人はテストや受験のためのインプットの英語は沢山学んできたがアウトプットの練習はほとんどしてこなかった。それに対しベトナム学生は先生や生徒とも授業中は英語で話し、積極的に自分の英語を恥ずかしがらずに使っていた。学生に尋ねてみると独学で勉強をし、外国人が集まる場所に行き英語を学んでいると話していた。日本の英語教育が全て間違っているのではなく自分の努力が足りず会話ができないことを再確認することができ、これからの自分の英語に対する危機感を認識する必要があると考えた。

4. おわりに

今回のプログラムを通じて自分の実力が足りないことを実感するとともに、新しく知ることがたくさんあり、自分自身を見つめなおすきっかけとなった。今まで海外で働きたいとは考えていたものの具体的な事までは考えてはおらず、自分の英語力も通用するであろうと考えていた。しかし今回実際に海外に行き自分の現状を知り、このままでは厳しいことを感じ、今後さらに努力を積み重ねる必要があると認識する良い機会となった。また今まで海外で英語を使い就職するとなるとアメリカやヨーロッパだと決めつけていたが東南アジアに実際に行き、彼らが英語を流ちょうに話す姿を見て自分の将来の新しい選択肢が増えた。日本に帰ってきて徐々に英語や海外就職の目標の意識が薄れていき、プログラム前の自分に戻るのには参加した意味がなくなってしまうためこのプログラムでの悔しさを忘れず、常に挑戦、努力をし自分の目標を達成したいと考えている。